



注目の新刊を
チェック!

片桐俊浩著

ロシアの旧秘密都市 (ユーラシア・ブックレットNo.153)

(東洋書店、2010年)

ISBN978-4-88595-926-4 A5判・64頁 定価:本体600円+税



手前味噌ながら、昨年2月号の本誌で、「ロシアのモノゴード(企業城下町)問題」と題するレポートを発表した。その際に、ロシアの企業城下町の一つのパターンとして、軍需・核・宇宙開発といった特殊な産業に携わる閉鎖都市という類型があることを指摘しておいた。今般、まさにそのテーマを扱った著作『ロシアの旧秘密都市』が「ユーラシア・ブックレット」のシリーズから刊行されたので、地域経済特集の枠内でこれを紹介してみたい。

これも個人的なことだが、先日ウクライナのドニプロペトロウシクを訪問した。この街には、クチメ元大統領が企業長を務めたことでも知られるミサイル工場「ユジマシ」がある。現地でも聞いて、驚いた話があった。この工場生産されたミサイルを運ぶため、工場から長大な地下トンネルが伸びており、往時には毎週のようにミサイルが搬出され、そのたびに地上の街が振動で揺れたというのだ。そして今でも、頻度こそ減ったが、街が揺れることはあるという。旧ソ連の軍需産業がいかに巨大で、しかもそれが人々の生活と隣り合わせに存在していたかということ、改めて実感させられるエピソードだった。

さて、当然のことながらソ連時代には、ユジマシのような戦略重要企業を擁するドニプロペトロウシクは、外国人の立ち入れない閉鎖都市であった。ウラジオストクなどと同様のケースである。実は、本ブックレットのテーマは、そうした「閉鎖都市」ではない。ソ

連には、その存在が公にされていない、地図にすら載っていない都市が、多数に上ったのだ。これらにつき、著者は一般の「閉鎖都市」との混同を避けるため、あえて「秘密都市」という表現を用いているわけだが、これは法律用語ではないとのことだ。「閉鎖行政領域体(ZATO)」という法律用語はあり、2010年現在42のZATOが存在するものの、これとてすべての秘密都市を網羅しているわけではないとされている。

現時点でZATOに暮らしているロシア国民は約130万人とのことであり、つまり旧秘密都市の住人と明確に言えるのは国民の1%弱ということになる。このように、秘密都市というのはあくまでも限定的な現象ではあるのだが、本書を読んでいると、この現象こそ何よりも雄弁にソ連という国の成り立ち、その本質を物語っているのではないかと思えてくる。著者は、過剰なレトリックを廃し、割と淡々と事実を描いているのだが、それだけに、鉄のカーテンの向こうの、そのなかでもさらに秘密の存在だった諸都市におけるソ連市民たちの営みには、つい引き込まれてしまう。

体制転換後に旧秘密都市は、総じて荒廃が進んだり、犯罪の温床となったりしたようだ。市場経済に何とか適応できたところもある一方、いまだに出口なしというところもある。とくに旧秘密都市の多いスヴェルドロフスク州やチェリャビンスク州の地域経済を考えると、目を向けるべき問題だろう。

(服部 倫卓)